

平成 25 年度関東学園大学プロジェクト型授業報告書

アカデミック・カフェの展開

担当教員：伊藤栄晃（関東学園大学経済学部経済学科教授）

参加学生（学籍番号・氏名）

ソフオモアセミナー

21211032

21211036

21211041

21211042

21211501

21211502

目次

本文

I 本プロジェクトの選定理由と目的	4 頁
II 「書評」カフェの実践：年間の行動記録（研究スケジュール）	5 頁
III プロジェクトの成果（結果）と課題の考察	7 頁
文献リスト	15 頁
担当教員の講評	16 頁
註	16 頁

I 本プロジェクトの選定理由と目的

1) アカデミック・カフェとは・書評カフェとは

アカデミック・カフェとは、主に大学人や専門職の人が、街中のオープンな雰囲気のカフェつまり喫茶や軽食ができる店で、その場に居合わせた市民と、それぞれの専門の最新の話題について情報を提供したり問題を投げかけたりして、飲み物などを手に気軽な感じで語り合う、自由な知的交流の場です。

このようなカフェイベントの源流は、フランスの哲学者マルク・ソーテが 1980 年代初めにパリ近郊で始めた「哲学カフェ」にあるようです。この「哲学カフェ」は、当初ソーテの友人ら 10 人前後で始められましたが、しまいには 200 名もの人々が集まる大きな会合に成長したといわれていますⁱ。

また 1990 年代後半には、自然科学の最新の話題を市民に提供しようという、「サイエンス・カフェ」が、イギリス・フランス両国でほぼ同時に始められましたⁱⁱ。

このイベントに刺激を受けてのことと予想されますが、最近日本でも東京周辺や京阪神、そして福岡県などで、それぞれの特色を生かした「カフェ」が盛んに開催されています。

例えば東京と千代田区の専門学校「文化学院」では、毎月第 3 金曜日に「クリエイティブ・カフェ」を開き、参加費 500 円で学内の講師に話をしてもらっています。また大阪大学は京阪電鉄「なにわ橋駅」の地下 1 階オープンスペースを借りて、学内講師を招いて自然科学の話題を提供する「ラボカフェ」を月 10 回のペースで開いていますⁱⁱⁱ。

これらのカフェは、何かと敷居の高かった大学と一般社会との垣根を越えて、大学での研究・教育の成果を市民に分かりやすく伝え、知的情報・知識の一般への還元と共有を図るものです。と同時に、市民の側からも、ともすれば閉鎖的に見られがちな大学世界に、自由な発想で刺激を与えるという、相互作用が期待されてもいます。

「書評カフェ」とはそれら様々な形があるアカデミック・カフェの中では、一番簡便な形態のもので、要するに今話題の本や非常に物議を醸すような本、あるいはかつて出版されたがその価値が今ようやく再認識された本などを取り上げ、その内容について市民とともに語り合う会です。今回我々がプロジェクトとして取り組んだのは、この「書評カフェ」、ならびにそのバリエーションとしての「ビブリオ・バトル」を太田市内で開催することでした。

2) プロジェクトの目標

関東学園大学は、昔から「地域への有用な人材の輩出」をうたってきた大学です。しかし地域との知的交流という点では、まだまだ十分な活動を展開していないのが現状です。そこでわれわれ 3 年前から伊藤ゼミで試みられてきた「アカデミック・カフ

エ」は、この現状を何とか少しでも改善するためのささやかな試みの一つでした。これまでの先輩たちの積み重ねの上に立ち、さらに充実したカフェの展開を期して、今年度「アカデミック・カフェの展開」として、プロジェクトを立ち上げました。

本プロジェクトの到達目標は、以下のように二つあります。第一にカフェイベントの企画・運営を主体的に実行することで、コンピテンシーの向上を目指すと同時に、地域の人々と自由な雰囲気の中で意見を交換し、自分の考えを説得的に展開する力をつけること。第二に地域における関東学園大学のプレゼンスを高め、市民に有益な情報の提供を行うこと、社会問題について提起をし、地域とともに「地域で」学び考え成長する場を打ち立てることです。

3) 課題

昨年度ゼミの先輩方は、「アカデミック・カフェの実践：太田市におけるオープンな知的交流の会」というプロジェクトを立ち上げました。そこでは、映画カフェやミュージック・カフェなど多彩なイベントを展開しました。しかし今年は原点に立ち戻り、書評カフェの実践に絞って活動を行うこととしました。

理由は、先輩たちが太田市ではまだ十分には知られていない「アカデミック・カフェ」という企画を市民にアピールするため、新しい企画作りに追われ、また無理をしてイベント回数を増やしてしまったためです。未消化のまま内容が伴わないイベントが幾つか出てしまったことです。

しかし先輩たちの苦勞もあり、関東学園大学伊藤ゼミの「アカデミック・カフェ」は少しずつ太田の町に定着し始めています。私たちが、おなじ苦勞をする必要はないと考えました。そこで先輩の失敗の経験を良く考え、いろいろ議論したうえで、今年度は敢えて回数の多さや企画の新奇さを追わずに、じっくりと価値ある本を選び、それを読み合って、市民の皆様と語りかけることを優先してカフェをやろうということになりました。

II 「書評」カフェの実践：年間の行動記録（研究スケジュール）

次に本プロジェクトの1年間の行動記録を紹介します。

- ・ 4月～5月：ソフォモアセミナーの時間に、アカデミック・カフェというイベントについて伊藤先生より説明をいただき、合わせて先輩たちの成果と反省点とを紹介いただきました。その上で本年度のプロジェクト授業としての企画内容について討論を行う。昨年度10回を超える様々なイベントの記録を見て、積極的にイベントをやってみたいというメンバーと、そのような企画は自分にはとても重すぎて実行できるかどうかあまり自信がないというメンバーがありました。

そこで伊藤先生のご指導に従い、皆で討論して、まずイベントの回数をできるだけ

少なくすること、そして企画は「書評カフェ」に限定することで、プロジェクトの内容の充実の方を重視することを決めました。つぎに紹介する本の選定でした。これが非常に難航しました。いろいろな本が対象として取り上げられたのですが、カフェイベントで書評のテーマとなるような、人目を惹く話題性がある、自分たちの勉強にもなる本という、なかなか難しかったです。結局は自分たちではまとまりがつかず、伊藤先生の海外出張などもあり、議論は宙に浮いた感じでした。この時期はゼミの雰囲気はとても重苦しく、またゼミ発足直後で心はバラバラで、みんな本当に自分たちにカフェなんかできるのかなと、不安を抱えていたと思います。

- ・6月： 6月後半に入り、伊藤先生が帰国してからようやく話は進み始めました。最後はやはり伊藤先生に紹介いただいた何冊かの中から、吉村和就著『水ビジネス——110兆円市場の攻防——』（角川書店、2009年）を選び、その書評イベントということで、今年度のプロジェクトは始まりました。
今年度は結果的に3回カフェを行いました。それぞれは、以下の通りです。

第1回目 日時：2013年7月5日（金）15：30～18：00
場所：「カフェ・ド・セラ」（太田市東本町）
本：吉村和就著『水ビジネス——110兆円市場の攻防——』（角川書店、2009年）
プレゼンター：奈良 拓也
参加者：奈良・武井・星野・堀越・李・謝（伊藤先生）

第2回目 日時：2013年11月22日（金）15：30～16：50
場所：Jazz&Coffee'N'（太田市東本町）
本：今井昭彦著『反政府軍戦没者の慰霊』（お茶の水書房、2013年）
参加者：奈良・武井・星野・堀越・李・謝（伊藤先生）
担当 第1章プレゼンター：武井 コメンテーター：堀越
第2章プレゼンター：李&謝 コメンテーター：奈良
第3章プレゼンター：星野 コメンテーター：堀越

第3回目 日時：2014年1月24日（金）15：30～17：00
場所：Guitar Research Wood Stock（太田市西矢島町）
企画：猪瀬直樹前都知事の著作のビブリオ・バトル
参加者：奈良・武井・星野・堀越・李・謝（伊藤先生）
担当 武井：『欲望のメディア』（小学館、2013年）。
星野：『言葉の力：「作家の視点」で国をつくる』（中央公論新社、2011年）。

李・謝： 『空気と戦争』（文芸春秋社、2007年）。
奈良： 『日本国の研究』（文芸春秋社、1999年）。
堀越： 『決断する力』（PHP 研究所、2012年）。

この間、三松祭期間中の2013年10月27日（日）に中間発表会（プレゼンター：奈良拓也）及び、2014年1月22日（木）に成果発表会（プレゼンター：堀越遼平）で発表しました。

Ⅲ プロジェクトの成果と課題の考察

3回のカフェそれぞれについて、参加者個々の感想や問題点の提起を以下に示します。個々の点についての評価・見方は、人により大きく異なりますが、意見の独自性を尊重し、敢えて調整せずに収録します。

第1回カフェについて

内容報告： 文責 奈良

第1回アカデミック・カフェは、太田市東本町にあるカフェ・ド・セラというお店で行われました。今回のカフェは、書評カフェということで一冊の本を取り上げてそれについて話し合いをしました。取り上げた本は上記『水ビジネス』。すでに7月に入っていたが、第1回目のカフェということもあり、なかなか予定どおりにはいかず、反省の多い内容だったと思います。

僕は最初のカフェで最初の発表者として本を紹介しました。本の内容は、日本人にはあまり関心がないようなもので、「人類の8人に一人は安全な水を飲めない」というのが最初のテーマでした。安全な水が、安価にそして大量に水道から出てくる日本が素晴らしいということが分かりました。恵まれている状況に感謝しなければいけないなとも思いました。

他方、世界では異常気象や人口増加の影響などにより、水不足が深刻な問題になり、国際紛争の原因にもなっていることも分かりました。そこで僕は、この問題の根本解決は難しいと感じました。人類は紀元前より資源を巡って争ってきました。今も世界中でこの争いが続けられています。日本は少子化ですが、世界では人口は増加しており、水を巡る争いはますます増えるのではないかと思います。

逆に言えば、そこに大きなビジネスチャンスがあるとも思いました。二つ目のテーマは「水ビジネスと巨大水メジャー」です。2025年には世界の水市場は、110兆円市場になると予想されているが、民営化された上下水道事業は、フランスのヴェオリア・ウオーターとGDFスエズ

社、イギリスのテムズ・ウォーター社の 3 社がほぼ独占している状態です。日本企業は海水淡水化の膜などの技術力は高いが、上下水道を管理するノウハウをもっていないのです。そのため単なる膜の納入メーカーになっている状態と、著者は嘆きます。

三つ目のテーマは「日本の水ビジネス海外進出のために」です。課題はいろいろありますが、水道事業の民間委託をすすめ、海外進出を加速すべきであるというのが、著者の主張です。そのためには水道料金の値上げによる資金確保、広域化の促進、流域単位の管理や事業統合の推進、公民連携の推進などが必要とされています。

このようにとても素晴らしい内容だったが、議論はとても低調で、盛り上がりには欠けるものでした。プレゼンターの僕としても、とても残念でした。

文責：堀越

セラにて、私たちの初めての書評カフェを開始しました。本のタイトルは『水ビジネス』です。プレゼンターは奈良君で、コメンテーターは謝さんでした。初めての書評カフェということもあり、大変緊張しました。といっても私は直接発表したわけではないのですが、発表者と同じ気持ちで臨みました。

成果としてはまず、何も意見が言えなかったのが非常に残念だったと思いました。というのも、準備不足が主な原因だったと思われます。特に私たち参加者は、その本の内容・資料を十分に読んでおらず、プレゼンターとも事前に綿密な打ち合わせをしたわけでもなかったもので、当日はなんと途中で議論が終了してしまいました。残った時間は雑談になってしまい、初めての会としては、本当に残念な結果となってしまいました。

しかし悪い点ばかりでもありません。今回の件で、「準備不足」がどれだけ周りの人たちをがっかりさせてしまうか、よく分かったからです。この時の反省点と課題としては、①当日までに全員が本の内容を把握すること、②事前に質問の内容をシミュレートしておくこと、そして③全員が自分の意見を言えるようにしておくこと、が挙げられると思います。

この会で良かった点を挙げるとすれば、プレゼンターの奈良君がとても良い発表をしてくれたことです。もう一つは武井君が、我々が苦戦する中で、奮闘してくれ、必死に会話に参加してくれたことです。

文責： 武井

第1回目のアカデミック・カフェ。記念すべき第1回目は、オーナーさんや地域住民の方を交えての幕開けとなりました。僕は「初めてとしては、奈良君の発表はよかったな」と感じています。態度が堂々としており、意見もはっきりと述べていたからです。ポイントのまとめや説明も文句なしの出来栄でした。

しかし残念だったこともありました。それは周りの皆が意見を言えてなかったことです。第1回目ということもあり、緊張していたのかも知れませんが、恥ずかしがらずに堂々と意見を発言できれば良かったなど、少々反省しています。

文責： 星野

初めての書評、しかも公の場ということもあり、自分が主役ではないにもかかわらず緊張しました。本の内容としては、日本の水資源・水源が外国に狙われ買収されており、これにどう対処すべきか、というものでした。日本は水の豊富な国土であるため、あらゆることに欠かせない水というものを多く確保できています。しかしこれが当たり前になっているため、その大切さを失念してしまっているのが現状です。そこで水関連の事業も郵政のように民営化させることで、日本の水源を守ろうと、主張されました。

恥ずかしながら自分も水が多く湛えられた国だというところで認識が止まっており、そこから先の他国から狙われビジネスとして成り立つという観点は持っていませんでした。その意味でこのたびの水ビジネスについての本は、生活に不可欠な水を見直す良い機会になるのみならず、物事を多角的に捉えることの重要性を思い出させてくれたように思います。

実際の様子としては、進んでの発言は皆無といえるほど、ただ話していることを受けていただけになってしまい、建設的な意見を出せませんでした。考える時間は十分あっただけに、深く反省すべき点だと思いました。

文責： 李

日本は「瑞穂の国」と呼ばれ、世界でも有数の水資源国です。各地にご当地の「名水」があるのもそのためですが、近年重要な水源の幾つかが外国資本によって買い取られていると報じられています。世界では「水」が石油と同じ重要な戦略資源です。水は「命」です。水が

なければ「生命力」が失われます。水はすべての生物の源泉です。

日本の水は大丈夫でしょうか。水ビジネスの将来はどうなのでしょう。水はビジネスにして本当に良いのでしょうか。水は商品になるのでしょうか。これらいろいろの問題について、カフェで討論しました。私は、水はビジネスではないと思います。水は全人類共同の資源で、誰でも自由に利用できなければなりません。水は私たちの命だと思っています。ビジネスになると、水を持ってゆく相手は、私たちの命を持って行くのですから。

文責： 謝

近年おいしい水、健康・美容に良い水に対するニーズが高まり、市場経済では水が商品として注目されるようになってきました。このような背景の中で、日本では浄水器・ミネラルウォーターなどのメーカーや、水を中心商品とする「ウォーターバー」などの飲食店での水ビジネスが、拡大するようになってきました。

世界的にも、先進諸国では清涼飲料水が巨大ビジネスになると同時に、発展途上国では生活用水が常に貴重品になっているところも少なくありません。今後世界単位で水ビジネスの拡大、「資産としての水」の貴重化が予測されるようです。

第2回カフェについて

文責： 奈良

第2回目のカフェは、著者の今井さんの同席の上でのカフェでしたが、メンバーは1回目よりも発言が少ないように感じたので、今井さんには申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

文責： 堀越

2013年11月22日にJAZZ&COFFEE'Nにて、2回目の書評カフェが開始されました。本のタイトルは『反政府軍戦没者の慰霊』です。このカフェには何と著者の今井氏が参加されました。さらに前回のカフェの時とは大きく異なり、一般の方々が多く参加され、新聞記者の方までご来場いただき、前回のアカデミック・カフェ以上にとても緊張しました。

まず良い点から述べます。①前回よりも準備不足が解消された。②役割を分担してプレゼンを行ったので、全員が参加することができた。この2点です。この本はページ数が多く、内容も難しいので、2人ずつ

3班に分かれて、本の1～3部を分担し、それぞれその所掌の要約と打ち合わせに専念できました。全員が、自分なりに要約でき発表できたのがとても良かったと思います。特に感心したのは、留学生の二人だと思いました。全く文化的背景が異なり、難しい漢字や日本語が沢山あるのにもかかわらず、彼らは分かり易く発表してくれました。

悪い点を述べますと、発表が終わったのち、議論に参加できなかったことです。参加されていた一般の方々と伊藤先生、それに著者との会話を中心になってしまい、私たちゼミ生6人は、終了時間まで黙ってしまいました。カフェ終了後、先生とマスターから、「積極的に会話に参加することが大事」「自分の意見をもって議論に参加してみたい」とアドバイスをいただきました。

文責： 武井

11月末に行われた第2回目のカフェ。前回は一人の発表でしたが、今回は全員参加でした。太田市内在住の文筆家、群馬県立女子大学でも教鞭を執られている、そして今回のテーマとなった本の著者である今井昭彦先生をお招きしてのアカデミック・カフェでした。

著者がいる前で本の感想や自分の意見を述べるというのは前代未聞の経験でした。正直なところ僕自身はもちろんのこと、皆緊張を隠せませんでした。

全体の感想としては、前回よりはぐっとレベルが上がったのではないかなと感じました。以前よりも、皆はつきりとしゃべることができるようになったのではないかな、と発表を聞いていてつくづく思いました。

ただ、やはり積極さと盛り上がりという点では、まだまだでした。もう一歩だったかなあ、何が足りなかったのかなあ、と改めて考えてみたいと思いました。緊張こそしたものの、どこか達成感を味わえた2回目でした。

文責： 星野

著者今井先生の同席のもと、全員で『反政府軍戦没者の慰霊』について発表しました。前回から少し間が空き不安でもありましたが、その分読み込む時間も十分にあり、良かったと思います。自分の担当は第3章の西南戦争での戦没者についての議論でした。第1・2章で取り上げられた戦没者たちとは異なり、開戦以前には仲間であったということもあってか、その埋葬法が、格段に敬意が払われたものであった

ことが、書かれていました。

全体の雰囲気としては、一般の参加してくれた方々が多かったことは、喜ぶべきことだったのですが、学生としてはやはり肩身が狭く感じました。発表自体は読み込む時間は十分にあったものの、それにはばかり気を取られ、話し方に頭が回らず、壇上で大分手間取ることになってしまいました。これは、準備時間の配分の失敗が原因だろうと考えます。この会の反省点でした。

各人発表終了後、議論では今井氏をはじめ大人の方々に圧倒され、私たちは誰も意見を差し挟むことができませんでした。回数が少なかったこともあるでしょうが、何より話を受ける体勢であったからだろうと、考えます。今と昔、日本と西洋での死者への考え方や、靖国参拝などの見解は、聞いているだけでも興味深かったです。

文責： 李

第 2 回目には『反政府軍戦没者の慰霊』について討論しました。太田市に住んでいる、文筆家今井昭彦氏が今年 6 月に発表されたこの本の出版のお祝いもかねて、内容を紹介し書評しました。内容は、幕末戊辰戦争や西南の役という日本を二つに分けた内戦です。

反政府側の戦没者の弔い方が問題になりました。彼らは政府への逆賊とされましたが、他方日本の民衆の間には未練を残した戦没者ほどんな立場の者でも手厚く葬る伝統があり、その調整のためどのような試行錯誤がされたのか、という隠れた日本史の問題です。

文責： 謝

『反政府軍戦没者の慰霊』について。幕末戊辰戦争や西南の役といった日本を二つに分けた内戦では、反政府側の戦没者の弔い方が問題になりました。今私は大学生として自分の立場から考えて、戦争に対して何の理由があるのか、何の目的があるのか、非常に疑問です。それはすごく怖いことだと思います。現在でも世界では国と国との間で戦争が絶えず、それは矛盾の存在です。和平はいまだ世界の主題です。

第 3 回カフェについて

文責： 奈良

第 3 回目は 2014 年の 1 月下旬で、準備期間も余りありませんでしたが、最後ということでやり切りました。都知事を辞任した猪瀬直樹氏の著書を各メンバーがそれぞれ担当して、ビブリオ・バトルを行うと

いう企画でした。

今回カフェは、1回目・2回目と比べてみた場合、一番よくできたと思えました。クオリティーの差はあったものの、全員がしっかりと発表できたことは良かったと思いますし、各メンバーがそれぞれの多少の個性を出して発表できたということも、最初のカフェと比べ、大変な進歩だと思えました。

お店の様子も、とてもよかったです。楽器店の隣につくられたカフェで、ジミ・ヘンドリックスのアイテムなど、とても店主のこだわりが感じられました。

結局のところ3回しかカフェを実施することができませんでした。メンバーが昨年より少なかったことや、プロジェクト型授業の初心者ばかりであったことなどを考慮すれば、致し方ないのかなとも思います。できれば書評カフェのようなものばかりではなく、映画カフェなどもできれば良かったと思えました。しかし今回は、メンバーが少人数ながらも、なんとか最後にはそれなりに形になって、本当に良かったと思います。

文責： 堀越

第3回目のアカデミック・カフェは、書評カフェではなく、ビブリオ・バトルでした。ひとり1冊ずつ（留学生は二人で1冊）の本を互いに紹介し合い、プレゼンテーション力を競い合うのです。本のテーマは「猪瀬直樹」です。

この3回目のカフェは、間違いなく成功と言えると思います。全員がそれぞれ決めた本について、分かり易く発表できたと思えますし、フリップを使った「良い点・悪い点」の説明も上手くいきました。前回は自分たちの発表が終わったら、終了まで黙り込んでしまいましたが、今回は発表後も黙ることなくマスターやご参加いただいた方々と会話ができ盛り上がりました。

なんといっても最後に全員が自分の意見をみんなの前で発表できたことが一番良かったのではないかと思います。後期試験が近かったこともあり、いつもより早くカフェは終了してしまいましたが、前回以上に盛り上がり、とても良いカフェだったと思います。最後にマスターからお褒めの言葉を頂戴し、本当にうれしかったです。

文責： 武井

最後のアカデミック・カフェ。昨年、都知事を辞職した猪瀬直樹氏。

実は彼は作家としても有名な方で、これまでも数多くの本を執筆してきました。最終回となった第 3 回目は、猪瀬氏の書いた本をそれぞれのメンバーが選び、その良い点・悪い点をまとめてプレゼンしました。

皆それぞれの意見に「ああ、なるほどなあ」「そういう考え方・見方もおもしろいなあ」と感心の連続でした。第 1 回目からすれば、大きく進歩したように、感じられました。

第 3 回目はすごく楽しい時間を過ごすことができました。やはり度胸がつくと言っていた伊藤先生の言葉は本当にその通りだったなあと、改めて感じました。

文責： 星野

メンバー全員で、ビブリオ・バトル形式で、猪瀬直樹氏の著作のうちそれぞれ選んだ本を紹介し合いました。前回での経験を生かし、話し方も考えつつ、内容を手元にまとめたことで、滑らかにとまではゆかなかったものの、完全に止まることなく、なおかつ落ち着いて発表できたように思いました。

文責： 李

猪瀬直樹氏は、オリンピックの東京招致に成功したすぐ後で、5千万円借入露見事件により辞職させられるという、まるでジェットコースターのような運命に翻弄されました。しかし有能な作家である彼の著作を私たちは 5 冊（詳しくは文献リスト参照）選び、それぞれ紹介し合いました。私は謝さんとともに、『空気と戦争』を発表しました。

この本の良い点としては、①教科書から抜け出した大戦直前の実際の雰囲気を感じることができること、②戦時ドキュメントの描写の素晴らしさ、③表現が小説そのもので、良くも悪くもエンターテインメントに徹していること、などです。

自分は日本の困った点として、①太平洋戦争がなにか劇的なことがあったわけでもなく始まったこと、②この時代について学校でほとんど教えてくれないこと、③「空気」や「数学」については今でも変わらないこと、などが思いつきました。

文責： 謝

私は李君と一緒に『空気と戦争』を読みました。この本は、戦前は天皇制・軍部・独裁制、戦後は平和民主主義といった、断絶した捉え

方に疑問を投げ掛けるものです。寧ろ戦前と戦後は、日常性という点で連続しているというのが、重要な問題提起です。

明治以来今日に至るまで、実質的に日本を動かしてきたのは、天皇主権でもなければ、主権在民でもなく、官僚主権であると主張しています。お上任せの享樂的な庶民の日常性は連続しており、国民は未だに思想的・政治的に自立していないとも言われます。自我の確立は、明治時代の福沢諭吉の願望にもかかわらず、未だ西欧並みには程遠いということなのでしょう。

まとめ：成果と課題「今後に向けて」

奈良： アカデミック・カフェは、立場が関係ない議論と交流が目的だと思います。しかし私たちは、プレゼンテーションだけに気を取られ、本題であるそちらを理解せずなおざりにしていたのではないのでしょうか。いかに発表するかではなく、いかに参加してもらい、自ら意見を投じるかをはっきり認識しておくことが必要と思われる。終わってしまった今こそもう一度開いてみたい気持ちが沸き起こってきます。ところでいただいたコーヒーの味は、緊張のせいかわくわく覚えています。少しもったいなく思いました。

堀越： 第3回目のカフェを終えて、間違いなく度胸とプレゼン力とが付いたと、全員が実感できたと思います。しかし最後まで「全員が議論に参加する」ことが達成できなかったのが、非常に悔やまれることです。

武井： 1年間アカデミック・カフェをやってきて分かったことは、以前は人前で話すことを恥ずかしがっていた自分が、「僕はここまで変わった」と実感できたことです。人前で発表することは、確かに緊張するし大変なところもあります。しかしそれを通して度胸がつくと、大きな自信につながります。僕は今回のプロジェクト型授業で教わったことを大切に、これからも頑張ってゆきたいと思います。

文献リスト

- ・猪瀬直樹『欲望のメディア』（小学館、2013年）。
- ・猪瀬直樹『言葉の力：「作家の視点」で国をつくる』（中央公論新社、2011年）。
- ・猪瀬直樹『空気と戦争』（文芸春秋社、2007年）。
- ・猪瀬直樹『日本国の研究』（文芸春秋社、1999年）。
- ・猪瀬直樹『決断する力』（PHP研究所、2012年）。
- ・吉村和就『水ビジネス——110兆円市場の攻防——』（角川書店、2009年）。
- ・今井昭彦『反政府軍戦没者の慰霊』（お茶の水書房、2013年）。

担当教員の講評

2011年、関東学園大学伊藤ゼミが太田市で初めてアカデミック・カフェが試みてから、3年が経った。この間当ゼミでは書評カフェ、映画・映像カフェ、音楽カフェなど様々なイベントをプロジェクト型授業として展開してきた。

しかし学生のコンピテンシー育成プログラムとしては、大きな課題があった。それは、大学の地域におけるプレゼンス向上と学生コンピテンシー開発という、二つの目標のバランスをどう取るかという問題だった。昨年度までは、地域にこのイベントを定着させる必要と要請とから、地域の「大人」の社会人の厳しい目に耐えられ得るレベルの企画を立て、それを担当教員が事前に周到にお膳立てして運営せざるを得ないこともしばしばだった。そこでは学生の主体性は、ある程度犠牲にされた。しかしそれでは、学生自身が置き去りにされ、コンピテンシー開発にはつながらないこと明らかである。

そこで、今年は思い切って、企画の原案だけは提示して、かれら学生の成長変化をじっくり見極めながら進むこととした。歯がゆいこと極まりなく、指導教官の立場から何度も手を出しかけては、ひっこめるという状態だったが、試行錯誤を繰り返しながら学生たちは驚くほどの成長を見せてくれた。それは、「Ⅲ プロジェクトの成果と課題の考察」に収録された、学生たちの生の感想を見るだけでも明らかである。彼らは、実に生き生きと自らの成長を実感していることを語っている。地域とともに「地域で」学び成長するという、当初の目標は、メンバー全員がそれぞれ十分に達成できたように思う。

関東学園大学経済学部伊藤ゼミの3年にわたる試みは、これで終了となる。このささやかな成果を生かし、何らかの形でさらに発展させた大学プロジェクトが立ち上がることを、切に望みたい。

平成 26 年 2 月 18 日

伊藤栄晃

ⁱWikipedia 「哲学カフェ」項目参照

ⁱⁱWikipedia 「サイエンス・カフェ」項目参照

ⁱⁱⁱ読売オンライン 2009年6月の記事より